

京交山岳部報

№ 383

'84 9月号

〔第1501回例会〕 比良西面の谷

口ノ深谷

(T)

日時 9月2日(日) 三條京阪 7時集合
担当者 本局 鷲見敏一(TEL 3418)
備考 ヘルメット、わらび、地下たび、シュリング、カラビナ、着替え一式

〔第1502回例会〕 渡辺朋子さん追職記念登山

半国高山

(R)

日時 9月9日(日) 国鉄バス京都駅 7時45分発乗車
コース 京都一小野郷…岩谷…岩谷峠…△半国高山…真弓…持越峠…白梅橋—
三條京阪
担当者 本局 楠とし子、方山宗子、原田加津子(TEL 2219)
費用 記念品代とも 会費1,000円(記念品代のみの方は500円)
備考 途中の谷でソーメン流しをする予定です、多数参加して下さい。

〔第1503回例会〕 お月見登山

大文字山

(R)

日時 9月13日(木) 錦林車庫 6時半集合
担当者 錦林 武田喜久郎(TEL 2375)
備考 昨年は雨ふりであったので、本年こそはと期待しています。

〔第1504回例会〕 中国山地

大万木山、琴山(嶺原) 女亀山(赤名)

(T)

日時 9月14日(金)~16日(日)
コース 京都南—中国自動車道—七塚原S.A(仮眠)—三次—R54号線—
嶺原町—大万木登山口…滝見コース…大万木山△1218m…権現コース
…横平コース…登山口—琴引荘(泊)…琴引山△1014m…登山口—布野
村…女亀山△830m…R54号線—三次I.C—中国自動車道—京都
担当者 OB 伊藤潤治(TEL 463-4936)
備考 大垣の山葵会と合同で登りたいと思っています。

[第1505回例会] 鈴鹿

藤内壁

(T)

日 時 9月15日(土)~16日(日) 九条車庫 8時集合
 コース 京都-栗東-鈴鹿峠-湯ノ花温泉...付近の谷で幕営
 担当者 横大路 岡本義弘(TEL 2668)
 備考 岩登り道具一式 テント泊、マイカーで行きますので希望者は担当者まで。

[第1506回例会] 鈴鹿山系の最高峰

御池岳 藤原岳

(T)

日 時 9月23日(日) 八条口 6時出発
 コース 京都-名神彦根-大君ヶ畑
 A班 鞍掛橋(峠)...鈴ヶ岳...御池岳...藤原岳...坂本-鞍掛峠
 B班は逆コースを取ります。
 担当者 高速 岡田茂久(TEL 3282)
 備考 マイカーでA・B両方から登り、山頂で車を交換してそれぞれ下山します。

[第1507回例会] 揖斐 坂内の山をいく

シリーズ 第四回 蕎麦粒山△1298.7 (T)

日 時 9月29日(土)~30日(日) 午後出発予定
 コース 京都-赤坂-広瀬-大谷川西又谷出合幕営...東南尾根...△蕎麦粒山
 担当者 OB 伊藤潤治(TEL 463-4936)
 備考 昨年12月に計画しましたが果せなかったので再行するものです。

例会予告

35周年記念集中登山

御嶽山

日 時 10月13日(土)~14日(日)
 コース 田ノ原、黒沢口、濁河温泉の3コースより頂上で合流予定
 担当者 本局 広瀬光太郎、山元誠一、鷲見敏一(TEL 3418、841-9361)
 備考 35周年記念事業として春は大江山、夏は利尻大雪の山と登ってきましたが、秋の集中登山としてスケールの大きい木曾御嶽山を計画しました。全員参加を目標にしておりますのでふるって参加してください。

今月の集会

9月10日(月) 下鴨寮

企画運営リーダー会

9月20日(木) 田中宅



記念登山 利尻山

岡田茂久

計った、練った、備えた、そして登ったみんなの力で、京交山岳部創立35周年を記念して、だれでも参加し登れることを目標にした、海外ではなく小さいけれど意義は大きいエキスペディション。20名の参加を得て北海の孤峰「利尻山」に登ってきました。

深いガスの中のおどろしく奇怪な岩峰群、色とりどりのお花畑の彼方の青い海と白い雲海の対象的なコントラスト、悲劇の海オホーツク海へと続く利尻礼文水道からの利尻山は、悲しいほど青空に聳え、その鋭い麗姿は我々の目に強烈に焼きついている。

初代部長の「すこぶる快調」のことばとひょうひょうと歩む姿に励げまさされ、あえぎ登った北の国の尾根「大雪山の縦走コース」、期待した熊はでなかったがアゴがでてしまった延々と続く広大な山域。「北海道て山ばかりやんか！ 平野の彼方の地平線どこにあんね」Aさんのつぶやきが聞える。

みんなのみんなの山の絵本のページに素晴らしい思い出を描いてくれた「北の山利尻山から大雪山へ」の記念登山、今月号は記録としては重複するがそれぞれの想いを綴ってもらいそのまま載せてもらいました。

30周年には南端の山「屋久島宮ノ浦岳」へ、35周年には北端の山「利尻山」へ、次の40周年にはいよいよ海外の山かな、夢は大きく育てていきたいものです。

伝統の歴史を想い、未来へと希望を継ぐ記念登山、次回はぜひあなたも参加して下さい。

京交35周年・北の山利尻岳 登山にあたって

昭和24年7月1日、従来の登山部を改組し京交山岳部として発足、以来10周年には武奈ヶ岳集中登山、15周年に御岳集中登山、20周年に長老ヶ岳集中登山、25周年には能郷白山に記念標柱を建植、30周年には南の果て屋久島宮の浦岳に、そして今年35周年を迎え「北の山 利尻岳」に20名の大パーティで6月29日から7月3日までの予定で大雪山系までも含み記念登山をする計画となった。

利尻岳。「日本百名山」で深田久弥は「利尻島はそのまま利尻岳であった」また「それはまるで空を刺すように鋭い三角錐であった」とその印象を述べている。「日本登山大系」によると「日本最

北端に島全体が山を形造っている「速くてよき山、1719mの利尻山がある。島の中央に山頂を突きあげ、本峰・南峰・北峰の三つのピークを持つこの山は六つの稜及び六つの沢で形成されている。山頂附近の稜線は細く鋭く、沢は深く切れこんでおり、浸食の激しい特異な景観は利尻ならではのものがある。また利尻山に吹き込む風は「北海の荒法師」の具名を冠せられ、気象条件の悪さと地形の悪さは安易に人を近づけない。こうした条件下での登山はスリルを求める者に限りない征服感を与えてくれよう」とその概要と印象が的確に表現してある。

もっともこれは積雪期・バリエーションルートの場合を含むもので我々は鷺泊・沓形の一般登山道のルートを気軽に登りたい。とはいっても海拔0mからの登山でありそう簡単に登頂できるほど甘くはない。そのためにはリーダーの統率のもとにメンバーが各々の責務を心得、充分の準備とトレーニングを積み最善を尽した時頂上は微笑んでくれることだろう。

(北の山登山計画書より転載)

1493回例会。

京交山岳部 創立35周年記念登山

北の山利尻山から 大雪山へ

部創立35周年記念登山の
計画から実施までの経過

記念登山 C L

鷺見敏一

昭和24年に京交山岳部が設立され、近藤初代部長を始め、諸先輩の足跡を山岳部の伝統として受け継いでまいりました。以来、35年の歳月が流れ今年目出たく35周年を迎えるに至り、種々の記念事業を企画し催すこととなりました。

記念事業の一環として、7月1日の部創立記念日に「北の山 利尻山」登頂を主目標とする記念登山計画を立案、昨年度から着々と準備に取りかかってまいりました。今年に入って35周年記念登山の具体的な実施計画を発表し参加者の申し込みを受け付けたところ25名の参加申し込みがあり2月27日に第1回目の打合せ会を全員出席のもと下鴨寮にて開催することができました。以後、第2回・第3回と打合せ会を重ね計画資料を十分に検討し綿密な計画書を作成、5月23日に最終打合せ会を開催し全員に計画書を配布する。最終参加人員20名、トレーニングについては、山行内容の違った例会を3回実施し、又各自の公休日等勤務の合間に精力的にトレーニングがつまれ、資料面、体力面メンバー等万全に近い体制で出発することが出来ました。59年6月30日出発～

59年7月3日帰京。今回の35周年記念登山を無事に敢行出来たことは参加者全員の協力によるもので、C.Lとして重責を十分に果たせたかと疑問に思いますが、とにかく成功したことを共に喜びたいと思います。

なお、今回の記念登山に際し、数多くの方から御指導並びに御厚志を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

記念登山コース・タイム

(6月29日)

京都八条口	12:05 出発	(マイクロバス)
大阪空港	12:55~14:15	(日航 575便)
千歳空港	15:55~16:25	(国 鉄)
札幌駅	17:20~17:48	(")
南小樽駅	18:25~19:30	(徒 歩)
小樽港	20:05~20:30	(フェリー)

(6月30日)

沓形港	6:10~6:50	(タクシー)
見返台	7:30 出発	(徒 歩)
避難小屋	8:25~8:40	(")
三眺山	10:30~10:40	(")
鷺泊道合流	11:30	(")
迫下食事	11:45~12:10	(")
利尻山頂上	12:15~13:15	(")
長官山	14:25~14:45	(")
甘露泉	16:40	(")
野営場	16:50	(")

(7月1日)

野営場	8:00 出発	(徒 歩)
利尻神社	8:40	(")
鷺泊港	9:15	(")
ペン岬	9:30	(")
鷺泊港	13:10 出発	(フェリー)
香深港(礼文)	14:00~15:40	(フェリー)

35周年記念

おめでとうございます

暑中 お見舞申し上げます。

いつもは御無沙汰致しております。

毎月お送り頂く部報で皆様の御活躍を拝読しお喜び致しております。

さて 発足35周年おめでとうございます。35周年記念登山を部報で知り、亡夫 正樹も楽しみに致しておりましたことを思い出しました。

早速にと思い乍ら つい日々追われ大変遅くなりましたが、何かお役にたてて頂ければと思ひ、少額ではございますが同封させていただきます。

末筆ではございますが、部員の皆様の御健康と御活躍をお祈り致します。

かしこ

8月6日

宮後 純子

京交山岳部様

.....

上記のお便よりと金一封をいただきましたので、こゝに報告します。35周年記念行事として秋の集中登山や文化祭の行事に使わせていただきます。ありがとうございました。

稚内港 17:50~20:54 (国 鉄)

(7月2日)

旭川駅 2:40~7:10 (バス)
 旭岳温泉駅 8:40 (ケーブル)
 姿見駅 9:15~9:30 (徒歩)
 姿見の池 9:50~10:00 (")
 旭岳 11:50~12:00 (")
 雪溪下 12:20~13:00 (")
 間宮岳 13:25 (")
 北海岳 14:03 (")
 黒岳石室 15:13 (")
 黒岳頂上 15:43~16:00 (")
 " リフト 16:50 (ケーブル)
 ホテル層雲 17:50

(7月3日)

ホテル層雲 7:20 出発 (バス)
 旭川 9:50~10:30 (国 鉄)
 札幌 12:20~15:37 (")
 千歳空港 16:20~17:35 (日航578便)
 大阪空港 19:25~19:55 (マイクロバス)
 京都八条口 20:40~20:45

高山植物の礼文島

利尻島から約50分の船旅で礼文島に上陸する。マイクロバスをチャーターして桃岩へ出かけた。低い高原状の野原に3000m級の高山植物が咲きみだれ展望台から桃岩を眺めて北海の荒波で洗われた自然のきびしさの中でのたたずまいが印象的であった。帰りは港まで散策のコースを歩きながら、つかの間の楽しいひとときを過しました。

概算費用	交通費	194万円	会費	13万×20名=260万円
	装備費	2万円		4千円×4名=1万6千円
	バンガロー他	2万円	金一封	11名 7万5千円
	食糧費	25万3千円	計	269万1千円
	写真代	2万5千円		
	おみやげ代	2万3千円	差引	40万円 返金
	通信費他	1万円		(2万×20名)
	計	229万1千円		

参加者 A班 (本局) 鷺見敏一、大槻雅弘、山元誠一、渡辺智生、沢井佳三、川原傳治、三橋 勉

	(高速)	岡田茂久、井上一夫	(横大路)	岡本義弘、中村富美夫
	(錦林)	武田喜久郎、加藤満生	(烏丸)	坂田利春
B班	(OB)	近藤 薫、山村敏郎	(本局)	渡辺朋子、方山素子
	(高速)	辻 久雄	(梅津)	吉田 武

以上 20名

北ノ山 「利尻山」

梅津 吉田 武

沓形港より縦走グループと別れ我々鷺泊コースの6名はタクシー2台に分乗して鷺泊へ行く。円錐形の利尻島を約1/2周すると鷺泊につく。沓形を出る時にはガスがかかって利尻山が見えなかったが、ここでは頂上まで見える。タクシーの運転手曰く「鷺泊が雨でも沓形は晴れている。沓形が雨でも鷺泊は晴れている。地元では良くある事だ。」利尻山麓休養村の管理棟の前でシュラフや今夜の食糧をおろしサブザックで登る用意をする。管理人が来ていないので管理棟の裏へ荷物を置きゴザをかぶせてかくしておいた。この事をタクシーの運転手を通して役場の人(管理人)に伝言しておいた。休養村を過ぎた所で林道も悪くなったのでタクシーを降りた。さあ、これから約1500mの標高差を登らなければならないと思うと気が重かったが、樹林帯なので比較的に楽に行けると思った。30分程歩いて朝食をした。大変おいしい弁当であった。空箱は帰りに持って帰ると山村さんが言ったので6名分の空箱を木に吊して出発する。樹林の中をもくもくと歩いた。時折り見える761mのピークを気にしながら… やがて樹木の背丈も低くなって1200mの長官山が見えて来た。鷺泊コースは弱者救済のコースなので日帰りで長官山まで登れたら良好であると思った。けれども僕はどうしても本峰まで登りたかったので途中から近藤さん、山村さん、渡辺朋さんを残して辻さんと方山さんをつれて頂上を目指した。そして長官山についた。本峰がくっきりと写真で見た通り迎えてくれた。A班と交信するとA班からは「長官山の小屋が見える」と言う事なので相当先行されているなあと思った。長官山の小屋の前からはノンストップで約500mの標高を登ろうと思って出発する。辻さんも方山さんもガンバっているが、少しづつ遅れてくる。A班「沓形、鷺泊の合流点より10分歩いた所で大休止している」と電波が入った。合流点から頂上までは地図を見ても少しだから頂上直下で大休止しているのであろうと思った。ローソク岩、頂上の祠も見えた。やっと頂上へたどりついた感じである。相変わらず沓形方面はガスが湧いている。島全体の景位が見渡せる。鷺泊ボン山の裾野より歩いて約5時間30分で頂へついた。A班、B班、共に握手して35周年記念登山を祝った。

【コースタイム】

沓形 6:15 ~ 6:25 … 鷺泊 6:45 … キャンプ場 7:05 … 3合目 7:20 … 4合目 7:35 … 5合目

8:20 … 6合目 9:00 … 7合目 9:55 … 長官山 11:00 ~ 11:05 … 利尻山 12:39

【Bコース参加者】 吉田、方山、辻、近藤、山村、渡辺朋

— 最北の名峰 利尻岳 —

山元誠一

日本最北の名峰「利尻富士」。何て響きのいい名前であろうか。北海道のはたまた西北に位置する離島の山。標高こそ、1,719mと日本アルプスの半分程度しかないのに、不思議な魅力を感じる山であった。そして、その山は訪れた私の期待を決して裏切ることなく、頂上直下の三跳山では険しい山容を、また、ペン岬では利尻富士の名に負けぬ秀麗で雄大な山容を我々の前に現わし、我々岳人の心を多に魅了した。

日本山名辞典によると、利尻山という地名の由来は、アイヌ語の「リインリ」（高い島）との事で、利尻島を形成する円錐状の成層火山とある。海洋上の孤峰のため気象条件が複雑との事。高い島という意味が行く前には理解できなかったが、利尻島から稚内へ向う船内から利尻島を見て「なる程」と納得した。それは、「利尻山そのもの」が海上にほっかり浮いているという感じであったから。

さて、6月29日正午に曇空の京都を出発し、バス、飛行機、そして千歳空港からは、列車、小樽から夜行の連絡船と、ありとあらゆる乗物を乗継いで、翌30日の朝には全員元気に霧に包まれた利尻沓形港に到着。そこで当初の予定通り、鵜泊から登られる6名の方達と別れ、我々14名はタクシーで見返台に向う。ところで、「タクシーで」と書いたが、実際に乗ったのは商用のワゴン車で、何故、我々がワゴン車に乗るハメになったかということ、島のタクシーの運転手の本職は漁師で、今朝は1時間で10万円もの稼ぎになる「ウニ」採りに出まわっていて、オーナー自らが、それでワゴン車を運転して頂いているとの事。暫し我々も亜然。（我々も山登りは後にしてウニとりに…）ガスの中、林道をゆっくり進むと15分余りで見返台に、晴れていれば正面（東方）に利尻の山頂が見える所であろうが、霧がかゝって展望は全くきかない。朝食を摂り、軽い体操をしさあ、いよいよ出発である。（7:30）

大槻さんを先頭にハイビッチで進む。長時間の船旅で、今だに揺れている様でおかしな気分である。しかし、30分程歩き一汗かく頃には体調は良くなったが、火山土の道はぬかるみ、難儀した。やがて少し開けた6合目の標識のある所にでると、相変わらず上はガスで見えないが、振り向くと雄大な裾野とその先に町がうっすらと見えた。緯度の関係で早くもハイマツが姿を見せ、少し行くとブロック作りの避難小屋に到着、大休止をとる。左側には標高が低いのかかわらずかなり大きな雪渓が見られた。その時である。ガスの切れ間から頂上らしきものが見えたので「以外と近いね。」と誰かの声、ところがである。もう少しガスが切れるともっと奥にさらにピークが見え、「やはりあの奥のがピークか」気を取直して再び出発。その頃から道端に高山植物がその愛らしい姿を現し初める。コケモモ、岩ギキョウ、キバナシクナゲ、そしてニッコウキスゲ(?)等々。

7合目の標識を過ぎた頃からは、強風が吹き荒れ寒い程であったが、8合目付近迄くると、我々の辿ってきた道は相変わらずガスで覆われているのに、鵜泊側は晴れ渡り長官山がすぐそばに見える。

この頃から長官山直下に到達したという鷺泊コースの方達との交信が始まる。そして、我々も三眺山に到着する。そこから見る利尻山頂はアルペンの雰囲気が漂い、さらに頂上の右側に連なる岩峰群がガスで見え隠れする様は、我々を魅了した。そこでしばし写真タイム。足元にはお花畑が広がり、三眺山という名にふさわしい所である。しかし、時折向いの沢筋の方から「ガラガラ」という落石の音が聞こえ、思わず気が引き締まる。もう暫くその景色を見ていたいと思ったものの、時間の関係で先に進む。沢側に降り、そして雪溪をトラバース(この雪溪の水を飲んだのであるが、茶褐色で気色悪かった)し、つづれ折りのきつい登りを登り切ると、そこは鷺泊コースとの合流点。登り初めて4時間余り、さすがにかなり疲れている。そこから少し行った所で昼食を摂る事になる。見上げれば青い空、見下ろせば青い海、ごくごく当り前。夏の太陽の光が降りそゞぎ、最高の登山日和である。昼食中、もう頂上を踏んできたという3人が下山してこられ、頂上まであと10分程度だと教えてもらう。また、沓形コースからも駒ヶ根山岳会の女性が1人で登ってこられ、我々を追い越していかれる。(娘さん、注意しなさいよ!) 我々も昼食後その女性を追う様に最後の登りを喘ぎつゝ登り切ると、そこは祠のある利尻山頂。ありました有名なローソク岩が、そしてその背後には雲海が広がり、北側に目をやると紺碧の海と空が…素晴らしい景色である。時間は12時15分。最北端の名峰は、京都からの来訪者である我々を暖かく迎えてくれたのである。コーヒーを作っていると、吉田さんら鷺泊コースの方3名も登ってこられる。記念プレートを祠の横に打ち込み、三角点がなかったのでかわりの標石の所で万才を三唱。鷺泊コースの他の3名の方を待つものの、仲々こられないので、吉田さんには頂上で待ってもらい、残りは全員下山する事にする。(その時頂上には、駒ヶ根山岳会の女性が1人おられたのだが…)

急な下りを慎重に下って行くと鷺泊コースの3人の方が、遙か下で我々を待っておられるのが見える。20分余りで3人の方と合流する。時間の関係もあったのでリーダーの判断で3人の方にも納得して頂き、そこから引き返してもらい事にする。(勿論、吉田さんにも頂上から降りてもらい事になる。)そして、三橋さん、岡本さん、井上君、川原君、そして私を含めた5名は先にバンガローで用意すべく先発する。我々は水を補給する為雪溪に降り、(他の方々は、長官山に登られた由)雪溶け水を充分飲み干し、バンガローに向け出発。鷺泊側はガスのかゝっていた沓形コースと違ってカンカン照りで、しかも風もなく下りであるにもかゝらずかなり疲れる。速くにボン山とベン岬が見えるが、かなりの距離である。途中2回程休憩し、2時間余りも下るとボン山の直下に到着。しかし、一向にバンガローというのが見つからない。やがて、野営場の標識のある甘露泉に着く。そこで、よく確認すれば良かったのに地図上で判断してもらって下だという事で、またどんどん下ってしまう。「人が通った形跡がない。」と言っておられた岡本さんと話しながら歩いているとそこは、「野営場迄 1.6km」の標識のあるアスファルト道路。それこそ「ドッ」と疲れがでて思わず墜り込んでしまった。

町迄買い出しに行った我々が戻って来る頃には残りの方全員が既にバンガローに到着しておられ、食事の準備をされていた。先発で降りていながらこんな事になって申し訳ありません。(夕食)星降る夜が明けると翌朝も好天。

利尻の山頂が見えたが遙か遠くで鷺泊コースの人達がよく登られたものだと皆で感心する。

旭川迄先行される方達を送り出し、我々は歩いて鷺泊港に向う。途中、利尻神社の祭見物をし、ベン岬へ。やはり、そこから見た利尻は雄大であった。正面に大きな裾野を持つ利尻岳、後にはどこまでも続くオホーツクの青い海、誰でもが詩人になれそうな雰囲気である。そこでわかったのであるが、この日もやはり杓形側はどれも雲がかかっているらしい。オホーツク海側の風の影響で杓形側（オホーツクに面している）は雲がかかりやすいのであろうか。

そして、もう2度とくる事もないであろう利尻の山に心を残しながら、利尻島をあとにし、礼文に向う。

利尻山（標高 1,718.7m）

6月30日 曇のち晴

中村 富美夫

6時10分、厚い雲に覆われた最北端の島、利尻島（アイヌ語で、リシリとは高い山と言う意味）京交山岳部20名を乗せた北海商船フェリーは、静かに杓形港に接岸する。北海の海では珍らしい波のない静かな海で、20時30分に小樽港を出航し約9時間40分の船旅である。

いよいよ今日は最北の山、待望の利尻山に登る日がやってきた。胸に何か一種独得の嬉しさが湧いてくる。下船の後予約してあったタクシーに分乗する。

A班は杓形から鷺泊コース、B班は鷺泊から利尻山往復コース、A班はC.L 鷲見氏以下13名、B班はS.L 吉田氏以下5名の編成で出発する。

6時40分、杓形港から車で約15分程山道を登ると、見返台の展望台が有る。見返台にA班14名が集合。朝食の後鷲見C.Lから利尻山登山の概要と注意を受ける。続いて岡田部長の安全登山と一般注意事項の説明が終了軽く準備体操をする。見返台から少し下った所に登山道の標識が立っている。広葉樹林のトンネルを登っていくと約20分程で額から汗が流れ出す。視界は悪いが足元に可憐な花が咲いて目を楽ませさせてくれる。

標高約900m附近から道松地帯に変ってくる。北アルプスの山では標高1,700~1,800m附近からと思うが、緯度関係で低い標高でも高山植物が見られる利尻山では植物分布が濃縮されている。

8時25分、7合目避難小屋に到着。ブロック作りの小屋だが中は荒れていて居心地はよくない様だ。山頂方面はガスに包まれて見えないが、時々三眺山が見え隠れする。海の眺めは非常によい場所で、杓形港、利尻空港、富士岬等が見望できる。朝の曇り空が嘘のように青空が広がっている

8時40分、避難小屋を出発する。登山道も少しずつ悪路になり傾斜もきつくなっていく。避難小屋から三眺山までが杓形コースの頑張り所だ。

10時30分、三眺山に到着。（標高 1,460m）狭いが眺めのよい台地になっている。利尻山南稜が頂上に突上げ、ガスが湧上がり3,000m級の岩稜を思わせる迫力がある。足元に目を

やれば切れ込んだ深い谷と、あたりは一面お花畑で高山植物が咲き乱れている。遠くに広がる碧い海と港町が箱庭のようだ。

10時40分、三跳山を出発する。鷺泊コースからの登山道合流地点までトラバースになる。急な下りで二ヶ所鎖とザイルがフィクスしてある。合流地点までのトラバースが沓形コースの難関である。十分に注意が必要で危険な場所だ。合流地点手前には雷溪が残っている。足元に気を付ければ安全に通過できるが、季節によってはアイゼンが必要となる場所だ。11時45分、頂上直下で昼食をとる。12時15分、利尻山頂上(標高 1,718.7m)に到着。

長い時間をかけて計画された利尻山登山、こうしていま自分の足で頂きに立つことが出来た。青空が広がり、360°の展望、眼下に紺碧の海、しばし<充実感><満足感>に酔う。

利尻山頂は30人~40人も登ればいっぱいになる狭いピークだ。厳しい風雪に耐えて祠が祀ってある。東にローソク岩と名付けられた奇岩が垂直に立っている。晴れていれば北の海の向うにサハリン(旧樺太)を望み、南は北海道の海岸線を見る事が出来るが、今日は残念だ。東から南は厚い雲海で西から北は快晴。南から西へと雲が動くが一定の場所で雲が消えてしまう。風が吹く方向により利尻山を挟んで島半分が相返する天候となる利尻島独特の複雑な気候の変化を見る。

12時40分、鷺泊コースからB班のS L吉田氏と辻氏、方山さんが登頂。頂上での再会を喜び熱いコーヒーで乾杯する。利尻山登頂を祝して京交山岳部恒例のセレモニーが行われ、「京交山岳部35周年利尻山登頂記念」と記された標板を祠の近くに打ち込む。記念写真をとり下山の準備をする。13時15分、山頂を後にする。約30分程下ると大先輩の近藤薫氏、山村敏郎氏、渡辺朋子さんが待っておられ、20名全員集合となる。両先輩のトップで長官山に向う。

14時25分、長官山△(標高 1,200m)に到着。振返って見る利尻山の美しい姿、碧空に突上げる頂きは素晴らしいの一語に尽きる。登山道が頂きに向かって伸びている。

14時45分、利尻自然休養林野営場に向け出発する。約2時間3合目甘露泉まで樹林帯の長い下りが続く。利尻富士と呼ばれる様に裾野が広く、やっとの思いで清流が流れる甘露泉に着く。「甘露泉」字のごとく冷水が美味しかった。水筒に水を一杯入れて約10分で今夜の宿泊地の野営場に到着する。

16時50分、予約の洒落た新造のバンガローに各4名が分散し、疲れた足をやすめる。各バンガローで夕食をとり、夜半まで山行の話や雑談に花が咲く。山行で一番気の休まる、そして一番楽しい時間でもある。

大雪山系縦走

中村 富美夫

大雪山(アイヌ語でヌタクカムウシュベ)は一つの峰に付けた名称ではなく、北海道第一の旭岳(標高 2,290m)をはじめとし、2,000m級の高山が20峰近く連なる火山群の総称だ。明治の詩人が「富士山に登って山岳の高さを語れ、大雪山に登って山岳の大きさを語れ」と表現したそうだ。それほど大雪山は他に見ることのできない雄大なスケールを持った山岳地帯だ。

7月2日 晴

2時40分、稚内から急行「利尻」に乗車旭川駅に到着。眠い目を擦りながら駅の待合室でステーション・ビバークと酒落こむ。6時前後に各自寝不足の顔で出発の準備をする。

7時10分、旭岳温泉行のバスに乗車。車窓から見る旭川の町並、田園風景、そしてバスは大雪山旭岳の懐に入っていく。途中の道端にミズバショウが咲き、季節の違いを強く感じる。

8時40分、旭岳温泉に到着。大雪山旭岳ロープウェイに乗車、途中天女ヶ原駅で乗換えて終点姿見駅まで12分、標高1,600mまで運んで呉れる。9時15分、姿見駅に集合、CL 鷲見氏総括の岡田部長両氏の大雪山縦走に就いての注意事項の説明があり、軽く準備体操をする。

9時30分、高山植物が可憐な花を咲かせている遊歩道を、大先輩の近藤氏、山村氏のトップで姿見の池まで約20分花を楽しみながら登りだす。

9時50分、姿見の池に到着。小さな池だが逆さ富士ならぬ逆さ旭岳を池に写し出す。旭岳は赤茶けた岩肌を露出して地獄谷からの噴煙が出すイオウの臭いが鼻をつく。空にそびえ立つというより、デンとあくらをかいている山容だ。

10時0分、旭岳の登りが始まる。登山道は火山岩のガレ道で歩きにくい。富士山の登山道によく似ている。裾野に広がる大小の山々が様々の雪渓を持ち素晴らしいコントラストをつけてかぎりなく広がっていく。これが北海道の山なのだと感じる。

11時50分、北海道第一の高峰旭岳に到着。一等三角点(標高 2,290.3m)があり広い頂きである。廻りの雄大な景色に北海道の最高峰に登頂したという実感が湧いてこない。人間の感覚とは不思議なものだと思う。三角点標に集合し、近藤氏の音頭で「万才三唱」で旭岳登頂を祝う。

12時0分、大雪山縦走に出発する。後旭岳には大雪渓が残っている。各自グリセード、尻セード、それぞれ残雪を楽しみ雪渓を下る。雪渓の下部がキャンプ場になっている。冷水が流れる川に近く広々とした場所である。

12時20分、キャンプ場で昼食にする。雪渓を渡る風は冷たく体感温度も下る。熱い味噌汁が何よりの御馳走だ。13時0分、キャンプ場出発。いつも食事の後の歩き出しは足が重く、リュックの重さが肩にズシとくる。

13時25分、間宮岳に到着。(標高 2,136m)直ちに北海岳に向う。北海岳に近づくにつれて風が強くなってきた。右に小鉢平、左に御鉢平が眼下に見える。14時03分、北海岳に到着(標高 2,149m)最後のピーク黒岳に向う。強い風が五色岳方面から吹いて歩きづらい。右前方に鳥帽子岳(標高 2,072m)が大きく見える。少し下った所で休憩をする。食べ残した物は絶対に捨ててはいけない。ヒグマの餌になるからだ。縦走路にもヒグマは出没するそうだ。一人一人が気を付けてゴミを出さないことだ。赤石川源流を渡る所まで下りが続く。源流の河原に降り立つと雪渓が多く残っている。雪渓の上を歩いていくと対照的な季節を見る。左側は残雪の壁になっている。右側は山肌にお花畑が有り、黄、赤、白の可憐な花が咲いている。真に春と冬の景色だ。源流を飛石づたいに渡ると短時間で黒岳石室に着く。

15時15分、黒岳石室に到着。この小屋は大雪縦走路で随一の営業山小屋だ。後は一汗で京交

山岳部35周年記念登山の最後を飾る黒岳の頂上だ。

15時43分、黒岳(標高 1,984m)の頂上に到着。参加者全員で最後のピークを踏み事が出来た。黒岳は今年の標高年の山と言う事で、二重の喜びがあった。利尻山・大雪山縦走の成功を祝して恒例のセレモニーを大きな声で絶唱する。

16時0分、層雲峡温泉に向け下山する。7合目リフト乗場まで慎重に急斜面を下山する。リフト・黒岳ロープウェイを乗継いで層雲峡駅に着く。有名温泉地で観光客が多く、我々に向ける目線が気になる。

17時50分、ホテル層雲に到着。立派なホテルで泥だらけの登山靴が気になる。熱い温泉で4日間の汗と疲れを洗い流し、最高の気分で大広間に集合する。京交35周年記念登山・利尻山・大雪山縦走の完全走破を祝して乾杯する。

今回の記念登山に際し、大変な努力を傾けられた諸先輩、又リーダー陣の惜しまない労力が今回の完全走破に実を結んだと思います。参加者の一員として共に山に登り、汗を流した京交山岳部のいっそうの飛躍を願い、心から感謝します。

北の山の思い出

方山宗子

ホントに私でも行けるのかしら、写真で見るだけだったあの北の島の素晴らしい山へ。けれど今はもう雲の上にあります。赤、黄、白色の可憐なお花畑が広がる山頂、かなたに小さく見える港から続く一本の山道、あの道を登ってきたんだわこの足で。苦しいかった登りも、もうおしまい本当に登れたんだわ、写真で見るだけだったあのあこがれの利尻山。霧の中から急に姿を現わすオトギの国の魔法のお城のような奇怪な姿の岩の峰。どこまでも続くまっ白な雲海、ふりかえるとこちらはまっ青な空と海、本当に不思議な不思議な世界のような山頂でした。

大雪山。かなたに見える小さな丘をいくつもいくつも並べたような十勝岳。機関車のように蒸気を吹き上げ、白や黄色の石ころのまるで世界の果てのような地獄谷。それを登った山頂もやっぱり大きな丘でした。あたりいっばいに広がるお花畑の中の道。熊が出るよと驚かされてきましたが出てきたのは可愛い可愛いシマリスでした。本当に行ってきたんだわあこがれの北の国の山々へ。

不思議な島・利尻島

川原傅治

利尻島に登るとい話を山岳部に入って耳にしたのはいつのことだっただろうか。北のはての島

というイメージだけのこの島へ山岳部の方々といっしょに登る。利尻島は不思議な島であった。

まず、登りの途中の三跳山からの利尻山頂のながめは強く印象に残るものだった。よくSF映画で、海のはるかかなたに雪に覆われた島があり、その中心部や、ある地域には見たこともないような建物や人間がいて、そしてそこはパラダイスであるというようなストーリーを見ることがある。利尻島がそうであるというのではない。しかし、三跳山からのながめは、ある絵ハガキにあったように、1万何千年の間に少しずつ島がくずれていった歴史のモニュメントであった。そこで落石の音を聞いた。1万年の歴史の一瞬を、そして、その空間に我々はいたのである。特に南稜の尾根のすがたは圧巻だった。

頂上に立ってさらにこの島のすばらしさと、不思議さに目を奪われた。まず、雲である。1つの島のちょうど東半分が曇り、西半分ではその雲がこつぜんと消え、海が見えているのである。利尻は雲が消える島なのだ。そして1718mで雲海を見ることができた。よくその雲海を見ると、飛び出ているところ、くぼんでいる所など特徴的な雲海である。雲の大海原であった。

次は花である。この崩壊を続ける山には高山植物がびっしり群生している。頂上から海までのながめも花園であった。さらに、海岸からの山のながめもおどろきであった。次の日は山頂をジェット気流が流れていた。そして、その後レンズ雲が出て、というこれも変化のある光景だった。

こんなふうにして1日以上もこの島にいとすべてが姿に見えてくる。そして年に1度の祭りも見ることができた。風の強い1日であった。そして、海の美しさにも思わず感嘆した。コバルトブルーにかがやく海。このようにとにかく見るものすべてに感動した。しかし、考えてみれば何百年か前には、京都でもこのような美しさは感じることはできたのかもしれない。

「くま」も「へび」もない不思議な島の頂上に我々は登ったのである。

北海道 旭岳

川原 傅治

京交山岳部創立35周年を記念し、北海道利尻山、旭岳登山を明治、大正、昭和にわたる年齢層また交通局の色々な職場から、さらにOBをあわせ20名の参加者によって6/29～7/3の日程で実施する。

日程も利尻山(1718.7m)を登り終え、北海道旅行といったふんい気の中で、次の北海道最高峰旭岳(2290.3m)登山へと進んだ7/2朝、旭川駅でのステーションヒパーク終了後、朝食、昼食の弁当の購入をすませ、行動を別にしていた4人も合流し、参加者全員で一略大雪山系へ向う。「さすが北海道」と感心させられる真すぐな道略をバスに揺られ旭岳温泉に着く。ロープウェイを乗りつき、姿見の登山口へ。準備体操の後登山開始、朝の乗りは調子がでるまでに時間がかかる。水蒸気の上がる旭岳直下の地獄谷を左に見ながら20人が一隊となって頂上を目指す。天候くもり。どんどん高度をかせぎ、通称「金庫岩」の所で行動食をとる。一等三角点のある旭岳山頂に着く。初代部長の近藤さんの音頭で「バンザイ」する。ここから黒岳下のリフトまで縦走が始まる。旭岳の下りは雪渓で参加者それぞれに雪の下りを楽しむ。雪渓の切れる所で昼食を取る。この

あたりは高原地帯でバックパッキングでもやったら絵になる所であろう。その辺から「くま」や「リス」がひょっこり出てきそうな、そんな所であった。昼食をすませて間宮岳へ向う。間宮岳に着くと目前に「お鉢平」が表われる。また「お鉢」である。縦走路を右にとり、風にあおられながら北海岳へ向う。途中、いたる所に「お花畑」があり、坂田さんをはじめ、植物談議に「花」を咲かせていた。谷へ下ると雪渓、道のゆきにはお花畑、北海道の高原を思うぞんぶん楽しみながら、黒岳小屋に着く。小休止のあと黒岳へ、約30分で山頂着。今年の年号の山、1984mの黒岳である各自写真撮影を行い、リフト口へ下山。リフト、ロープウェイと乗り継ぎ、層雲峡着。層雲峡では今回の山行で初めてホテルへとまる。旅のつかれも一気に温泉に流し、楽しいホテルライフであった。旭岳登山は、計画上メイン登山が利尻山であったことと、実際に登山した利尻山のすばらしさが、強烈であったことなどから興味が少しそがれた感じではあったが、北海道の雄大さ、自然が多く残る山系等、これまた35周年を記念する登山にふさわしいものであった。

利尻山登山、全行程の総括等は別に行なわれるとして、旭岳登山の報告は以上とする。最後に、色々の事があった記念登山ではあったが、ともするとマンネリ化する日常生活から、みごとにぬけ出せた今回の登山は忘れられないものです。

あの北の島の頂上と、北海道の一番高い山に我々が立てたことを感謝します。参加されたみなさんどうもありがとうございました。

すこぶる快調！

緑 峰 生

「みたみわれ 生けるしるしあり…」である。京交山岳部創設35年の記念山行に顔を出すことができたのは嬉しいことだ。35年と言えば長くもあり、短かくもある。然し私の年齢から言えばほぼ半ばであって簡単に短かいとは言いきれない。

京交山岳部として発足したのが昭和24年7月1日とされているから今年ここに35周年を迎えるわけだが、交通局に山岳部あるいは登山部というサークルがあったのはこれより遡ること若干年であることは言うまでもない。その若干年も大切にしなければならぬ歴史の要素を含んでいる筈である。

私が交通局に就職したのは昭和23年8月だからその前年であった。こんな大きな職場だから山岳愛好者も多数おり、クラブくらいはあるだろうと期待し探し求めていたところへ巡り会えた。然し戦後の住民生活の不安定な折でなかなか大々的な山登りをということもなかった頃で、言わば残党(と言っては甚だ失礼だが)が再び動き出そうとしていたのに遭遇したという程度だったろうか自動車関係で伊賀氏、技術関係で川原氏、本局関係で永橋氏らの顔が思い起される。登山部を復活したいという声に応じて私も仲間に入れてもらうことにした。最初の山行は比良で、10人ばかりが正面谷を廻行し金糞峠を越えたあたりに崩れかけた暮雪小屋があってそこで記念撮影をした記憶がある。大峰登山はそれまでも年中行事として続いていたようだった。

その後誰というともなく気運が盛り上って山岳部再発足となったのが昭和24年7月1日で、活動も細々としたものだったのは仕方がなかった。皆が計画を持ち寄って積み重ねられた例会が最近では1500回に重んずるのだからその間の部員の努力は大きい。当時ザラ紙の裏紙の裏を使って例会の予告や山行の報告をしたことは思い出に残るが、この縁の下の力持ち役を担当したのは宮後正樹前部長であったことを特に想起したい。

私は35周年記念登山として利尻島や大雪山が発表された時、第1番目に参加を名乗り出たうちの1人だが、いずれ利尻島は予定の山に入っていたのもうけの幸いであった。然しこの大エクスペディションに私が参加するのは事実上可能性があるかどうか、リーダー陣の中には多大の疑念があったのではないと思う。事実、私は2年前心筋梗塞で生死の境をさました前歴がある。恐らくこの時を境に山とは縁切れだということも一度は観念した。然しどうしたつながりからか縁が切れずに済んだ。僅かの皮1枚で首がつながっている感じである。だがニトログリセリンとは縁が切れず、救急車のご厄介になれる範囲ということで行動半径が限られているというのが現実である。

だから私はこの山行に加わることに不安がないでもなかった。私以上にリーダー陣が心を痛めたのではなかったか。それを思うとリーダー陣には頭が下ろし申訳もなかった。神戸登山研修所長の前田浩さんの剣岳のこともあり、私も他の人々に迷惑をかけることがあってはいけないとそればかりを考えながらの数日だったが、事なきを得た今から考えるとほっとした気持である。私は行動中常に心配してくれたリーダー陣に対して「すこぶる快調！」と応えて歩きつづけた。然し、実際には「おおむね順調!!」というところが真相ではなかったかと思う。そして最後まで病人を擁して隊行動に意を用いられたメンバー全員に心から感謝の念を捧げたい。

利尻岳登山（B班別動隊の成立と本隊と 合流までの報告）

OB山村敏郎

鷺泊から利尻岳をへて沓形へのコースの本隊とは別に沓形ルートに登り頂上で鷺泊組と合流して同じルートをおるB班が編成されてリーダーにベテラン（鬼軍曹？）のY氏、T氏、K嬢と、やる気は十分でも体の方がいま一步の長老K氏、交通局停年あと50日、それにしてはほんとに若く美人に見える時もある（小生には年令のせいかもしれない）W嬢、それに小生の6人（以下あとの3人をB班別動隊と称する）元気に沓形バンガロー事務所裏に荷物をデポして必需品だけの軽装で出発。待たせてあったタクシーに乗りこんで舗装の道（事務所からは道が曲っていて見通しがきかないので相当の距離まで自動車で行けるような感じであった）を行くこと100m位で舗装終了。あとは地道。これも流砂どめの丸太が道を横断して設置してあるので車の通行は不能。合計乗車距離150m位、乗車時間1分弱、最初にまずガックリ、それでも元気に登山開始。

はじめの三人は無事利尻岳三角点まで到着して予定通りの行動となったので、こゝでは省略させてもらって、頂上まではその意態は別にして体力的にも時間的にもまにあわなかったあとの三人の別動隊の事を記録しておきます。この三人は明治、大正、昭和の三代からなり、男二人女一人の構

成でB班では今の言葉では「オチン・オバグループ」 それでもはじめのうちは至極元気。他の三人は互して殆んどひけをとらぬぐらいでこれなら十分に1,718m利尻岳の三角点を踏むことが出来るし、また踏まねばならぬと、ふりむくたびに沓形の港が次第に下の方に見えてくるし、パンガローの所では仰ぎ見なければならなかったボン山も遙か下に見えるようになってくるのに元気づけられてぐんぐんと高度をかせぐ。そのうちB班本隊と別動隊との間に次第に距離が開きはじめ、当初は声で連絡がとれたのにそのうちにトランシーバーによらなければ連絡がとれなくなる。別動隊はそれでも何とか長官山の小屋までたどりつく。こゝから見ると利尻岳はまことに美しいので、ついみとれてこんな美しい山など登るのはもったいないなど理窟をつけてしばらくうっとり眺めながら休息をとる。当初から別動隊にはあまり無理をせず長官山ぐらいが妥当ではとの気配もあるが、また折角来たのだから大した無理でもなければ頂上までは登りたいという気持もあるので、すでに長官山をすぎた本峰の斜面を登る三人をながめながら、ぼつぼつと牛歩を進める。おりてくる人に聞くとあそこに見えるピークから50m位のところが利尻の頂上ですとの事で、それなら多少の遅れがあっても何とか登れるのではないかと欲も出て来て、まず何よりの事と思っていたところ、いよいよ本峰への登りというところで悪いことに登山路から100m程の所に雪渓がありその雪の白さに引かれて一応そこで休憩中食ということに相談がまとまり、持参のパン・チーズ等で中食。ゆであずきと雪で氷金時もつくり至極満足。トランシーバーでは本隊とB班との通信もはいり別動隊を除いては順調らしい様子。別動隊へもこちらの様子をきいてくるので、こちらでも何とか登りたいと一応返事はするものの、此所で満足。昼寝でもしたい人や、往時どこかの長官もこゝまでしか登らなかったとの話もあり、身体のことを考えてかあまり無理をしないよう気をくばる様子の当部の初代長官、雪渓へおりの時にすべって肋骨にひびでも入ったのか背中ofいたい病人などが出て、も一つ意気があがらない。それでもねむい人には10分程昼寝をしてもらい、体調不良気味の人には何とか元気を出してもらって本隊と連絡をとりながら最後のひと踏張りとし重い腰あげて、また登りはじめる。(13時40分頃)牛歩ながら何とか長官山がはるか下の方に見え、あと一息と思われる9合5勺あたりに到着。(14時30分)余談ながら到着が若干遅れたのはこのすこし前氷金時を沢山喰べた人(茹小豆を沢山喰べた人)のおなかの中で金時があばれ出してその始末のために這松の中へしばらく姿を消した人があったため、もっとたくさんこちらに配給しておけばそんな事はなかったかもと、ひやかすのは男性二人。食べ物のうらみはきつい。余談はさておき、此の地点ではこちらの感じとしてはあと30分も頑張ればと位に思っていたのに、そこからはまだ2時間位はかゝるとの上からの無線。別動隊を待っていたのでは時間がないので下山すると山頂より連絡あり、9合5勺でも四捨五入すれば十になる事だし、別動隊は一応此所で登り終了ということにし荷物をおろして待機し下山の本隊と合流。それにしてもあと一歩で断念とは残念至極やら、ほっとしたやら、なさけないやらで心中複雑な気持であったのが別動隊でした。

それにしても他の人々にお荷物になった事は甚だ申し訳ない事だと思っています。

〔後記〕 (利尻岳、大雪山とは無関係に創立35周年に関連して部員の奥さんへ)

京交山岳部員はどの旦那をみてもへそ曲り奇人とはゆかなくても個性の強い人々ばかりで何をお

いても山また山。家庭などかまっている様子などさらになく、ひまさえあれば山また山。ひまがなければ無理をしてでも山また山。たまにファミリー登山などと称して御機嫌をとって誤魔化すくらいなのに、比良、北山、アルプス等々は勿論、屋久島利尻島まで行くといえだまって送り出してもらっている様子。どう考えてもどの旦那も（旦那自身はみな一応の人ではあるが）奥さんの方がはるかに立派で理解があり、旦那には「もったいない人」ばかり。例えばだれにはだれと考えてみてもなる程と思う人ばかり。こんな会話が天北線の急行列車の中でつれづれなるまゝにビールが酔がまわるにつれて某嬢との会話の中でとび出しました。誠にごもっともな話と同感至極。旦那はもっと奥さんに感謝しなければとも思いました。ビールが醒めた今でもそのように思っています。甚だ失礼ながら今後共、益々旦那をよろしく。

‘お荷物、から一言

渡辺 朋子

「もう標題はできてるもんネ」と山村さんと顔を見合せて思わず苦笑いしました。でも何て言われようと、とにかく歩きました。登りました。併し利尻はしんどかったですネ。何ほ歩いてても歩いて、遂に頂上へは到達いたしませんでした。一生懸命歩いたんですけど、とうとう近藤さん、山村さん、私と3人は途中からずんと遅れてしまいました。左手に何とも魅力的な雪渓が見えます。3人は思わず雪渓に足を踏み入れました。もうザラメではありましたが、口に含むとその冷たさが何とも云えない感触です。「あっ いい物がある！」もう先の3人の事など忘れてしまって3人で甘納豆を分け合いました。そして雪を乗っけました。グシャグシャかきまわしてロー一杯にほほばります。おいしい！ 親分の前で思わず叫んでしまいました。負けましたネ、この時ばかりは…

お天気はいいし、景色はきれいし、頂上は近いし、「さあ、元気を出してもう一頑張り」と歩き出した途端、いけません。「ちょっとお2人、すみません、早よ先行って」と笹の中へゴソゴソ、ちょっとごめん。オミヤゲを少し。

そして頂上はあきらめて、A班と合流いたしました。その次の旭岳もよかったですネ。高山植物の女王様にもお目にかかれたし… まだ成熟しきらないツンとすました女王様、それでいてコケティッシュな女王様、さすがですネ。

移り変わる景色の、本州では見られない雄大さに脱帽。実は風もきつかったのです。またまた必死で歩きました。「ここで止まったら再び生きては帰れない」とまあ大げさに言えばそうでした。でも良かったです。お荷物だの何だのと色々ありましたけれど、やっぱり行って良かったナ。私の卒業記念といたしまして誠に感無量でありました。ありがとうございました。

でも今度からは行く前に無理なら無理と言って下さいネ。「お荷物、からちょっと一言。」

（訂正とおわび）

先月号、山声雪語の文中、3ページ19行目のテトラケイクリコはテトラサイクリンのミスプリントです。

— 35周年記念登山を終えて—

利尻を想う

大 槻 雅 弘

屋久島で強烈に激しく打たれた雨も昨日のように、あれから5年が過ぎた。35周年記念登山のこの北の山「利尻山」も、あわただしい日々の中に迎えた。この利尻山に関しては特に30周年とのかかわりが深く、宮之浦岳と同時登山が出来なかったこともあって待ちに待った山でもあった。その北の海に浮かぶ山にいろいろと想いを馳せながら出発した。

小樽から出た船は町の灯りを遠ざけ、それと共に船の灯りを求め、闇黒の海に海鳥が鳴き叫び舞う。初めて見るこの海と鳥の情景。北海に舞うこの鳥は、我々の山に対する自然の厳しさよりも、なお激しく戦い生きているのだろうか。鳴き叫ぶ様に強い感動を感じる。

島全体が山、山全体が島とも言うべきか、日本百名山の深田久弥氏の言葉を借りれば「島全体が一つの頂点に引きしぼられ、利尻島はそのまま利尻岳であった」と言う。ベシ岬より見た姿、稚内に向う船上より見た山容はその表現どおりであった。1718mの頂上は登りも下りも長い道程ではあったが、苦労はその山の雄姿が何もかも忘れさずに充分であった。

登山行動における種々の感激や印象は普通時間経過を伴うものであろうが、この利尻山はすぐに答を出してくれた山だ。頂上で逢った信州の女性は「山頂から海の見える山だから」と言う理由で登りに来たと聞いた。なんと女性らしいロマンチックな答であろう。確かに登ってよし、見ても良しの山だ。7～8月は人口が倍にもなるといふ利尻、礼文島にロマンを求めやってくる若人の多いのもうなづける。

いままで数多く山に登ったがよい山だと言う時、それは得てして苦労して登頂した時に言うことが多い。苦労してと言うのにも、荷が重いか、径が無い、雪が多い、岩尾根が厳しかったとかいふような想いが巡る。そんな中で山容が、雄姿がというのにはあまり記憶をもたないが、あの頂きから見た海、白波の海岸線。緑と白に染った這松と残雪のコントラストの尾根。風の強かった稜線と船上より見た頂きの雲の流れの利尻は、恐らくいつまでもまぶたに残り、忘れることのない山として残るだろう。

利尻島は利尻岳

渡 辺 智 生

—それはもう一つの陸地ではなく、一つの山になった。…利尻島はそのまま利尻岳であった。(日本百名山 深田久弥著から)—

船は沓形港に接岸された。寝不足のまなこをこすりながら甲板から見た風景は、今にも降り出しそうな空模様の中でまだ眠りから覚めない村落であった。

それは、山陰地方でよく見かけるありふれた漁港のそれであり、ローカルと言えれば聞えは良いがレンガ造りの新しい建物だけが目を引く港であった。そこには美しい稜線を引いた利尻岳も、利尻島すらなかった。わずかな森林帯を抜けるとすぐにはい松帯となり景色は見るものもなく、足もとには刈り込んだ生垣のようにゴゼンタチバナの白い花の続く登りであった。

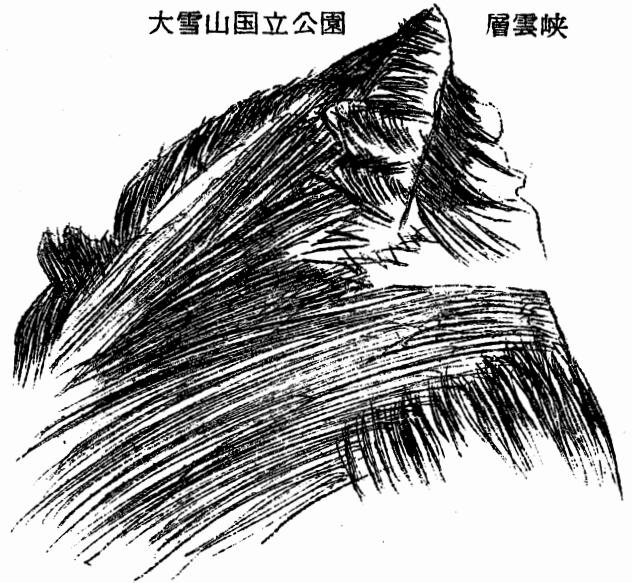
海拔ゼロメートルから登る山、「利尻富士」と呼ばれる美しい裾野を引いた山影はなく、わずかに左側篤泊登山道と思われるあたりの山はだが見えるだけである。船内アナウスに起され甲板へかけ上った時、目に写る景色は利尻島、やなわち利尻岳であるはずであった。そんな予想はみごとに裏切られたばかりか、せめて美しい裾野につながる海岸線すら見えかくれした。急な登行が続き流れる汗にさえ腹立しさを感じつつ黙々と歩く。

やがて、一つの鞍部に着いた。三跳山である。そこにはドラマがあり、俳優のいらぬ舞台があった。！ いつの間にか空は宵空となり鬼脇道に続くやせた岩尾根が屏風のように立っていた。尾根の向側はガスの中にありガスの流れによって我々観客を一喜一憂させ、カメラ片手に時のたつのを忘れさせた。

それからは舞台装置はますます充実し、山頂へと我々を導いた。「360度海岸線の見える山に登りたかった。」長野県から単独行で来たという女性に投げた質問にそんな答が返って来た。山頂からは篤泊と昨日の沓形港は見えるが、残念ながら鬼脇、仙法志は雲海の波が続いている。その姿はかえって神秘をただよわせ、ぜいたくにも高山植物を花模様にあしらひ長くスカートの裾を引く貴婦人のようであった。

篤泊への長い下りにも長官山、甘露水のおまけが付き、翌日は利尻岳神社の祭礼に遭遇、ペン岬で満足した我々を乗せた船から見る利尻島は、午後の日をあびて文字どおり海上に浮ぶ利尻岳であった。

大雪山国立公園 層雲峡



来て見たら 余り広さに
とまどいて
地図を頼りに 北の旅する
黒岳の 握りし雪の
冷たさは
北の旅路に しみる思出

第1495回例会

口ノ深谷撤退と 白滝谷溯行記

鷺見敏一

6月例会に上がっていた口ノ深谷が雨天のため目的が変更されたので、再度例会に取り上げ担当することにする。7月15日、7時三条京阪前に集合し2台の車に分乗、坊村から明王谷林道を口ノ深谷分岐点まで入り車をおりる。初参加の山口君を紹介した後、谷に入る準備をする。私も久しぶりの沢登りに胸をおどらせながらワラジの装着にかかる。全員準備もとのい、いささか天候は良くないが行動することにし谷に入る。おどろいたことに私が今までに比良の谷では経験したことのない増水量で、とても楽しみながら溯行出来る状態ではない。通常なら直登出来る小滝なども高巻しなければならぬ仕末、増水量の谷の状態や沢登りが初めての参加者等を考えると、このまま溯行することは危険であると判断し、「岡田、大槻両君も同意」谷を溯行することを断念、撤退することにする。沢登りを楽しみに参加してくれた、和田、井戸、山口、方山さん達も残念そうである。このまま中止して帰えることも出来ず、急きょ白滝谷に変更し溯行することにする。白滝谷溯行記は初体験者にバトンタッチする。

白滝谷溯行

山口雅直

昨年の春、由良川源流へ行った際、一般路が巻き道ばかりでうんざりした事もある、その頃から沢を始めたいと考えていた。それ故、山岳部へ入ってすぐの6月の集会で口ノ深谷の計画を知った時、是非お共させて頂きたいと思った。当日、コースこそ前述のような理由で白滝谷に変更になったものの、私にとっては期待に満ちたものであった。

鷺見さんを先頭にし、岡田さん、大槻さんの3人の間に、鷺見さんの奥さん、方山さん、井戸さん、和田さん、私の5人が入る形で溯行を始める。初めて履いたワラジがどういふものなのか、ワクワクしながら足を進める。何度か徒渉や足のおき方についての講習を受けたり、腰まで水につかったりして、水に入る事に慣れてくるに従い、水陸両用車のように歩ける事に快感を覚え始めた。しかしながら初心者マーク付の車の為思うようには走れない。情けない事には、大槻さんが簡単に乗り越す岩がなかなか登れず、頭から水の中へ落ちそうになる始末であった。

途中、小雨が降る中、井戸さんが流れに足をとられたり、方山さんもスリップして腰と足を打撲するアクシデントがあったものの、どうにか白石谷出合まで行きつき昼食となった。

この日の流量では、ここからは谷の様相が変わりばえしない為、昼食後しばらくして溯行を終了した。それから一般路で夫婦滝まで行き滝を見物した後、又、一般路を足を早めて下山した。特に

今回初めて沢を歩いて感じたのは、ワラジのフリクションが予想以上にきく反面、爪先が使えない為、ワラジの部分で確実に踏みしめなければならない事。バランスおよび力の入れる方向が大事であると感じた事があげられる。さて、9月には再度、口の深谷湖行の計画があるとの事。非常に楽しみにしております。

- 日時 7月15日 7時集合
- 担当 鷺見敏一（本課支部）
- 参加者 大槻雅弘、井戸澄夫、山口雅直、和田良一、方山宗子（以上 本課支部）
岡田茂久（高速支部） 鷺見 F（その他）

私の山道具に地下タビが！

方山宗子

連れていってもらった店を見てびっくりした。店先にダンプが駐り、作業衣が軍手が山と積んである。「10枚コハセの地下タビ下さい」鏡に写ったスカートに地下タビの姿を見たとき、こんな姿で歩くなんてもう死んでしまったほうがまし。次に釣具屋で、「これ何するの」と言ったのがワラジ!! 何か得体の知れない生物をつまむようにブラ下げて帰りました。いつも沢登りの楽しさを聞かされていましたが、いよいよ明日挑戦するかと思ふ未知への不安と期待で、よく寝られませんでした。谷の入口で装備をつけ、地下タビ、ワラジにヘルメット姿の自分を見たときは、昨日と違って変りどこでも行けそうな気持になりました。けれど最初に水の中に入りキューンと冷たい水を肌を感じたときは先ほどの意気込みはどこへやら、「もう帰りたい」と悲鳴をあげたくなりました。そのうちにリーダーの好リードで岩を飛び水際をカニのようにへばりついたりしているうちに、だんだんと面白くなりほかの人達が小さな滝などを頭から水をかぶり登っているのを見ると、「私もやりたいあーい」リーダーが私達のために安全なルートを指示してくださるのがうらめしく思ってきましたが、そんな気持をみこしたようになんでもないような所でスリップ! 油断大適「ゴメンナサイ」オヘソ迄水に浸って渡ったときは思わず悲鳴をあげましたが、沢登りって、何んて面白く楽しいんでしょ。もう、やみつきになりそう。

唐沢岳 幕岩

萌 椰 子

6月25日～28日

今回の山行は前年より広沢さんをお願いしてましたが、行動計画を立ててから私が体調を崩しまして日程の変更をして出発。しかし少★高望みで体力の壁に突き当たったのではと感じた恥かしなからの報告です。まず壁の位置は国地院2.5万図、烏帽子岳を見て下さい。詳しくはH社の登山大

系の7番の213頁を参考にして下さい。数少ない休暇や時間を最大限の有効な使い方の為に山行日程は毎度同じパターンで、25日の早朝からの勤務終了後用意してあるザックを自宅で積み込んで急ぎ現地へ向いました。

名神東インターより高速道を利用して中央高速道伊北インターへ、塩尻、松本、大町を経て七倉沢の駐車場に車を停めました。大雨の為に車中にて朝まで仮眠する。

26日朝、雨は相変わらず強く降り続いています。外が明るくなり気が付くと登山センターの屋根付きテラスに若者二人がピバグ中(この附近はテント禁止)少し様子を聞こうと我々もテラスへ移動する。一人の青年が広沢さんと顔見知りだったこともあり朝から話が弾みました。此所では昨日の朝から同じ調子で雨が降り続けているようで、彼等も幕岩に登る予定が停滞中、東京から来てます。勤め先は有名なKスポーツ、関東方面での壁のことなら連絡下されば少しはアドバイスできるのではと有難いお話、等々話をしてる間も雨は激しく全然止む気配ナシ、折角の話相手の青年も、今回は諦めずに出直しますと一番バスで帰ってしまった。

我々も今日はここで停滞ですねと例によって将棋を出して一番二番と勝負を楽しみましたが、10回もやると飽きてしまう。二番のバスでワンゲルタイプの青年が来る。彼も今日の行動は中止しますとテラスにマットを敷いて朝から寝てしまう。縦走ならば雨が降っても行動するのですが、壁の場合はどうにもなりません。この様な停滞は初めてですが雨足を跳めつつのんびりするものもいいものです。道の向い側には市営の温泉があり、宿泊や入浴も可ですが温泉に入る前にはひと汗かこうとテラスの天井の横張りにスリングを掛けてアプミ移動のトレーニング、又、3回も往復すると結構な汗が出ます。夕食前にゆっくりと温泉に浸かり、京から持参の缶ビールで停滞にカンバイ。まるで物見遊山の心地ですと… エーイ、明日も雨が降り降れと寝袋へ入る。

27日朝、早く目覚めるが雨、雨、雨でよく降るね!! これは今日も駄目ですね… も少し様子を見て止みそうでなければ帰りましたと相談、我々の横で寝ていた青年は一週間の予定なので中止できませんとポチポチ行きます。「気をつけて」「さよなら」と雨の中を出発する。我々も朝食を済ませ荷をまとめて車に積み、東電ゲートのオジサンにサヨナラを言って出発。しかし大町ダム附近までくると雨があがる。ウーン、迷いますね!! どうしよう、少し様子をみましょうと時間つぶしに大町山岳博物館へと足を運ぶ。大町市街を通り抜けて岳の上の立派な建物が博物館で入場料金参百円を支払い人気のない館内へと入る。

一階の展示場をぐるりとまわり最後の方の展示品の中に我が京交山岳部のバッヂが凜然と輝いているのを発見!! いかなるルートでこのバッヂが此所に来たのかは私には不明ですが、鼻が少し高くなった気持で二階を見学、三階の展望室で天候や如何にと山波を眺めれば、雲は切れて青空が少し出ている。コレハエライコトデスよ!!と急ぎ昼食をすませて七倉沢の駐車場へと引き返す。ゲートのオジサンはヤッパン!! という顔で迎えてくれます。素早く用意を整えてゲートをくぐりました。七倉沢を渡りすぐにトンネル、このトンネルを通過するのに10分強の長さ、それより30分程のゆるやかな登りの車道で高瀬ダムに着きます。この地より待望の幕岩が唐沢の奥に眺められます。高瀬ダムの水が放水中でなければ簡単にカラ沢へと入れますが、放水中はダムの堰堤の上まで

登ってからのマキ道を利用せねばならず相当のアルバイトが必要です。唐沢に入ってからには小さなケルンや赤ペンキの矢印に導かれて進みます危険個所には、ハシゴやフィックスザイルもセットされていますが、落石の為に痛んでいますから要注意です。

金時の滝は右岸壁の急なガリーを登りますが距離は100m程です。全体にフィックスが張ってありますが信頼はできませんし、右手の上にあるピナクルからの今にも崩れそうな落石は心配です。その後は単調な登りが続きますが重荷を背に右へ左へと岩をまたいで飛ぶのは重労働です。西尾根2286ピークD沢西側支尾根を越した沢が落ち込んでいる所は急いで通り抜けたくなります。体の何倍もの大きな岩が落ちて来て河原の岩と激突した様子が一面に見られて不気味です…から気持は焦るのですが体がいうことをききません。それより上流には壁の山と間違える残雪が3ヶ所程あり細長い落木を手に雪を踏み抜かぬ様にソロソロと渡りました。

B沢とD沢の出合にも雪渓が残っていますが一度D沢へ入り左手のフィックスザイルを使ってB沢へと登り込みます。この付近まで来て私は行動ストップのバテバテになり大休止を頼んで腰をおろし目前に迫りくる壁を眺めました。

この壁は案内書の図を見て想像していたよりすこく横巾が広く又色合も異様ですし雨上りの後なので壁の上部の彼方此方に水煙が立つのが遠望できます。これはエライ所へ来たよ!!というのが本音でした。

B沢を少し登り壁の正面に向って小さな沢を行けば大町の宿です。宿に着きマットを敷いて大休止の続きをやって広沢さんが偵察に行こうとの声もうわの空で体が動きません。ホントにこれぐらいの行動でバテては困るのですが、初日に楽をして気持がゆるんだのか壁の大きさに気遅れしたのか本当にバテたのか分かりません。しかし目と口だけは遠者に動きまして宿に備え付けのノートを引きっぱり出して読みましたが、京都からこの壁へ四季を通じて16回も通った青年があり驚かされますし、又多くの元気な若者の記録は楽しく読ませて頂きましたが30才では「オジン」だとの文章だけは少し気分を悪くしまして私も此の地へ来たぞと年令を明記の上で一筆記入しておきました。

彼が一人で偵察をして戻り明日は松本ルート(4級、A2、380m 8~10時間)ならば時間的に抜けるのが可能ですから出発を早くしましよ。今日は早く寝て疲れをとって下さいと夕食後すぐにシュラフに入りましたが高瀬川の上空を山小屋への荷上げの為にヘリコプターが遅くまで喧ましかった。

28日3時起床、4時出発、5時取付ですが案内書には取付へ早く行けると書かれていますが、大洞穴下の水に漏れたスラブのトラバースにはアブザイレンでも困りました。松本ルートの取付点はこの付近では一番にやさしく感じますが、雪彦山の三峰の前傾壁とよく似た感じです。間隔の短いボルト連打を見上げてまずはひと安心と出発しましたが、セカンドの私は時間の短縮だけを考えて登ろうと頑張りました。

第一スラブを越えメガネハングの左側の弱い所を枯木利用で登るのはボルトの節約ですが、ユラユラと揺れる枯木の上部に立つのは気持の良いものではありません。中間のランニングピレーが全然なしの第二スラブを通過、大広間テラスで小休止と軽食、此所より側壁に沿って直上、正面壁左

の中央カンテに取り付いてからがグレードアップ、雨の名残りの水が岩肌を濡らしその上にボルトヤピンの間隔が遠すぎて如何にもがけども体が上に進みません。己むを得ずインチキ登攀をやりましたが、トップはどの様な方法で登られましたのか?…不思議です。8時間15分で登攀を終了、しかし下山も油断できません。右稜のコルまで11回の懸垂で降りましたが時間は待ってくれません。小休止もそこそこに岩宿で荷をまとめて安全第一で唐沢を降りる。

金時の滝横のガリーは二回の懸垂、壊れかかったアルミハンゴを通過して難所が終る。高瀬ダムの下まで来てから登攀成功の握手。本日はこの後も長い行動が残ってますから気持を引き締めて車道のアルバイトをガンバって七倉沢の駐車場へ、市営の温泉は早仕舞をするのですが、今日はまだOKで早速汗を流し缶コーヒーでカンバイ。眠けを注意する為にこまめに運転交替で往略を復略につかい安全運転で進行、途中駒ヶ根サービスエリアで夜食の小休止。体力の差は運転にも及び彼に多くをお願いして無事に京都へ、自宅へ帰りついたのは29日の2時でした。

私の泣言は毎度ですが、特に今回は梅雨の真中で天候不順の為に登攀行動がかたよりましたし、所詮は瘦せ馬に重荷で広沢さんの好リードがなければ逃げ帰ってます。しかしながら身体髪膚は父母が二滴も山野に離散せず無事に登山計画より縮少しましたが湧り達げられた感激は、日が経つにつれて膨らんでます。

以上

【コースタイム】

- 6月25日 名神山科インター 16:45 - 中央高速伊北インター 20:20 - 塩尻 21:20 - 七倉沢駐車場 22:45
- 6月26日 雨で停滞
- 6月27日 七倉沢駐車場 8:45発...大町山岳博物館 9:30 ~ 10:25 ...七倉沢駐車場 11:15 ~ 11:45 ...高瀬ダム下 12:27 ~ 12:40 ...大町の宿 15:05着
- 6月28日 大町の宿 4:00発...松本ルート取付 5:00...終了点 13:15...右稜の下部コル 15:40 ...大町の宿 16:00 ~ 16:15 ...高瀬ダム 18:00 ~ 18:10 ...七倉沢駐車場 18:50 ~ 19:25
- 6月29日 自宅 2:00着

例会報告

例会No	目的地	月日	天候	担当者	参加者	記 事
1495	口ノ深谷	7月15日	晴	鷲見 敏一	大槻雅、方山 山口、和田 井戸、岡田 鷲見夫人	久しぶりの沢歩きでしたが、増水のため早々に撤退、白滝谷に変更のんびりと楽しみました。 別稿報告

1496	薬師岳	7月21日 ～25日	晴後夕立	津田 実	村、奥村 横井、石田 原田、三橋 津田夫人、 大槻貞	太郎平に到着すると薬師岳が大きい。昼食後、山頂めざして出発する。しかし雷雨のため、勇気ある撤退?となる。翌朝、大槻氏が頂上アタック、残留組は高天ヶ原、夢ノ平から大きな山頂付近を望遠鏡で眺めた。 次号報告
1497	夏山トレーニング 金毘羅	7月29日	晴	川原 博治	大槻雅、 鷺見、井戸 岡本孝 岡田、古市 坂田、台川	北鎌への訓練ということで朝方の雨にもめげずコンピラで実施。Yケン尾根を中心にザイル操作を一日みっちり訓練した。 いざ、北鎌へ!!
1498	伊吹夜行 登山	8月4日 ～5日	晴	井上 一夫	山元、方山 ゲスト参加 宮木、林	夜行登山というのに例年の4倍の登山者があり、頂上はゴロ寝の人で満員であったが、残念ながら御来光は曇りで望めなかった。帰りが又大変、長蛇の列でなかなか下山できなかった。

雑 報

▲ 8月集会報告

8月9日(木) 下鴨寮

出席者 O B 畑、津田、伊藤

本局 鷺見、和田、渡辺朋、楠、方山、原田、三橋

梅津 吉田 高速 岡田 烏丸 大倉、坂田、台川 以上 15名

- ◎ 記念集会の会計報告(担当 三橋) 残額(約1万円)は雑収入として会計に入れる。
- ◎ 御岳集中登山について(担当 鷺見) 10月中旬に3つのコースを考えている。
- ◎ 退職記念登山について(担当 楠) 約30名の参加者を目標にしている。
- ◎ 岳連報告(鷺見) 各加盟団体により国体のコースについて、秋に調査、協力依頼があった。
- ◎ 日中交友登山について 来年、西安の西140Kの大白山に登る参加者を募る要請があった。

▲ 部費受領

河合秀晃

8/2 洛西 広瀬烈 烏丸 片岡秀明 8/10 高速 岡田茂久、出海洋三、石田幸次、

8/3 横大略 大西純一、進藤義治、福田延行、中村富美夫 8/6 本局 樋口由紀子

8/7 醍醐 岡本 勇、長畑喜和、北川 晃 O B 箕田 昭、松岡伊太郎

帆布・濾布
テント・シート
雨合羽

木村工業有限会社

京都市中京区ミブ車庫前
TEL 801-5331 (代)
西大路営業所
下京区西大路七条下ル
TEL 321-0251

愛されるスポーツ店

京菱運動具店

本店 下京区大宮通松原上ル
TEL(801)1331
十条店 南区竹田街道十条上ル東側
TEL(691)8041
伏見店 伏見区柏香町西友ストアー4F
TEL(623)0824
山科店 山科区音羽野田町0番
西友ストアー山科店
TEL(592)9770内線228

一年中、山用品だけの プロショップ

おかげさまで創業5周年を迎え、
店も大きく、商品も充実させて
頂きました。もちろん開店以来の
全品徹底バーゲン価格も続行中!



ログ ケビン

京都市中京区御幸町通船場西角入
TEL(075)221-7569 番604
(寺町の一つ西の通りの終止東側)
西大路御幸町(西側)の西側は徒歩3分



真の専門店として
好日山荘は前進しております
山とスキー用具の

ことなら御まかせ下さい

確信ある用具を

確信ある価格で...

好日山荘



河原町六角下ル東入
TEL 241-1731

山の本

山岳書 電話ノ本にて

無料配送

ゆかり書房

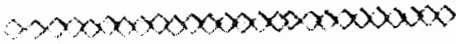
075(801)8333

昭和59年 4月 1日

京都市中京区壬生坊城町46

京都市交通局 内

京交山岳部

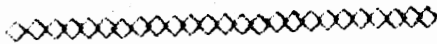


お知らせ

今度、当千ロル店舗は近代ビル改築計画に伴い、一時立退きと相成りました。改築期間中(約1年間)は、本店2階に千ロルコーナーとして継続営業いたします。

千ロル

移転先 本店2階
京都市中京区西ノ京町24
ダイヤ運動用品株式会社



まかせて下さい…ネ



のことなら…

☆在庫豊富にとり揃えています
☆山の道具は せと 御相談下さい
山とスキー 専内店

ビッグホリイユ

河原町店 上・河原町通丸太町東入
TEL 222-0363

御婚礼
御引越  専門

ぎおん菊水運送株式会社

山科配車センター
京都市山科区西野山踏町12-12
TEL (075) 581-3101

本 社
東山区大和大路通四条下ル 541-2345
箕川営業所
中京区室町二条上ル 256-3059

結婚引出物・内祝・開店記念品・粗品
仏事用お返し品・お中元・お歳暮用品

贈答品総合センター
厚生会指定

サンコークラフト

西 島 輝 雄

左 川端通丸太町下る下堤町88
TEL (075) 771-3442



山とスキーの店 京都 あるむ

京都市中京区新町三條上ル
075-255-0288



この用具の事ならユニシが一番です!

御来店ありがとうございます

山とスキー レジャー スポーツ ショップ
そして

海の



中・二条通河原町西 TEL 231-1202